

角川財団学芸賞選考委員会より

## 中世の社会システムとしての贈答

福原義春

今日この時代でさえ、頂きものにお返しすべきかどうか悩み、もし何かの具合でその機会を逸すると気持ちが悪く落ち着かないものだ。

その贈答のルールがどんな風にして中世には確立していたかを豊富な例証で説き明したのが本書である。しかもこれまでその裏付けになっていた呪術や宗教のような古代性に頼らず、中世的な合理性をその基本に据えたのが特色だ。

単純な互酬性に基づくものでもなく、儀礼的に適い、先例をも踏まえ、当事者双方の良識と節度に負いながらも、更に高度な計算を含んだ贈答のやりとりは一種の社会システムとなっていた。

時には一般的な市場経済の枠では律し切れないような贈答経済とも言うべき取引がなされておき、その世界では財が金銭に換算され、その結果として金銭そのものが贈答の世界に近代・現代の取引を超えていたのか。

贈答は朝廷・公卿・幕府などの言わば統治を動かす燃料でもあり、潤滑油にもなった。また寺社が仲立ちの機関となって、租税制度とは別の富の還流の作用を分担した。

初めは儀礼としての贈答だったものが次第に社会構造において果たしていくようになって役割は大きなものでありそうだと。

これら中世独特の贈答儀礼の慣行が今日までどのようにして維持されて来たのかを明らかにすることは、今後の課題であるかも知れない。

『贈与の歴史学』の研究はそれ自体学問的にも大きな意味を持つものであろうが、同時に現代に生きる日本人のライフスタイルを造った根源を明らかにしている点でも、一般読書人の関心をも十分にそそるものである。

ヴァレンタインデーとホワイトデーのプレゼントが現代の商業と結びついて定着したのもこのルーツの及ぼした影響だと著者は見るのだ。